

平真は、一目見た時から男を気に入らなかつた。宰相直属の手の者だという。そういう者達がいることは、杜愔から聞いて知っていた。しかし、どうしても嫌いなものは仕方がなかつた。その男が、今杜愔に命令していた。腹立たしかつた。宰相直属ということが、経略安撫使に命令できるほど偉いのか。そう言つて叩き出してやりたかつた。

「攻めるのを待てと」

「天候が崩れるまでだ」

杜愔の言葉に、男が答えた。異様に甲高い声だつた。体格は普通だが、腕が異常なほど長い。何よりも男の醸し出す気配が、平真には嫌悪感しか覚えさせなかつた。全身黒ずくめの胡服で、なおかつ顔も墨を塗つたような黒さだつた。夜になれば、完全に闇の中に溶け込んでしまふさうだつた。

「何を企んでおる」

杜愔が、精一杯の抵抗を見せた。

「おまえ達が知る必要はない」

「言葉を慎め。経略使様だぞ」

たまらず、平真が怒鳴つた。男は、少しの間平真を見詰めていたが、興味なさそうに卓の上の地図に目を落とした。

「謝らないのか」

平真はむきになつて詰め寄つた。男が面倒そうに顔を上げた。

「おまえは、都虞侯の平真だな。どうせ將軍に上がることは無理なのだから、杜愔に忠義だてしても無駄なことだ。大人しく下がっている」

「何だと」

平真が三尖刀を構えた。

「平真。よせ」

杜院が一喝した。平真が、雷に撃たれたように硬直した。

「太原府駐屯禁軍の二枚看板と言われているようだな。もっとも、も

う一枚の馮湧は死んだがな。おまえの三尖刀、俺に届くかな」

男がそう言って、にやりと平真に笑いかけた。口の端が大きく吊り上ったその顔を見て、平真は吐き気をもよおすほどの嫌悪を覚えた。

「よさぬか、二人とも」

杜愔が、険悪な雰囲気を読み取って注意した。

「まあいい。都虞侯ごときでは、我々のことを知らなくても仕方がない。だがな、これからは注意するのだ。次は、ただでは済まさんぞ」

男が恫喝した。平真は黙り込むしかなかった。

男は二三の指示を杜愔に与えて、尊大な態度のまま幕舎をあとにした。

杜愔が大きな溜息をついた。

「経略使様、何者ですか、あの男は」

平真の声には怒りが含まれていた。杜愔は、疲れたように目頭を押さえていた。

「黒死軍だ」

「黒死軍……」

杜愔が、平真に向き直った。

「宰相蔡京の私兵だ」

「そんなものがあつたのですか」

「闇の軍、そうも呼ばれておる。おまえも、有力な廷臣が私兵を抱えておることは聞いておろう」

「はい。ですが、せいぜい百人程度で、それほどの力はないと聞いております」

「黒死軍はな、そんなものとは違うのだ。数ははっきりとは分からぬが、おそらく三千は下らぬと思われておる」

「三千。それでは軍ではありませんか」

「そうだ。だから黒死軍と呼ばれておる」

「そんな数を維持できるのですか」

「名目上は、童枢密使に属する禁軍扱いになっておる。だが、一人でも維持出来るだけの資力を、あの宰相は持っておる」

「莫大な賄賂を貪っている」と、評判ですから」

「科挙くずれの男が束ねていると言われているが、詳しいことは誰も知らぬのだ。ただ、黒死軍の命令は絶対、その意向は宰相の意向と思えと命じられておる。文官、武官の上の方しか知らぬがな」

「そうですか」

「だから儂らも、奴の言うことをきくしかないのだ」

「ですが、私はあの男が嫌いです。命令に従いたくはありません」

「平真、おまえならそうであろうな」

「済みません、経略使様。もしも何かありましたら、私一人で責任を取ります」

平真はそう言って、深々と頭を下げた。

「宰相の蔡京は、これまで多くの政敵を、黒死軍を使って葬ってきた。もちろん、大物の場合、本人そのものではなく近くの者を殺すのだがな。その恐怖に耐えられる廷臣など、ほとんどおらん。後は、金の力で言うことをきかす。恐怖と金。この二つが蔡京の力の源なのだ。最近、殿前司の高俅も似た様な軍を組織しているらしい。蔡京、童貫と高俅は権力争いをおる。高俅にとっては、黒死軍から身を守るという意味もあるのだろう」

「高太尉の軍も、黒死軍のようなものなのですか」

「黒死軍に対抗させるために創った軍だからな。やはり、三千ほどはおるだろう。暗殺などもするようだ。蔡京と違うのは、高俅の軍は全くの私兵ということだ。だから、我々には関らない。その存在だけ知っておればよい」

「何という軍なのですか」

「五行軍と呼ばれておる」

「五行とは、木、火などの、あの五行のことなのですか」

「そうだ。青木隊、朱火隊、黄土隊、白金隊、玄水隊の五隊があるらしい。詳しいことは分からんがな」

「ですが、宰相に対抗出来るのでしょうか」

「力は遥かに蔡京と童貫の方がある。だが、高俅は絶対的なものを握

っっておる」

「帝」

「そうだ。もともと高俵なぞ蹴鞠の得意な浪子にすぎぬ。それが、偶然端王の目に留まり、これも偶然に八代皇帝になった端王について今の高位に就いただけの話だ。蔡京に負けず劣らず賄賂好きでもあるしな。高俵は、帝の機嫌を取ることにかけては天下第一だからな。蔡京といえども、帝を畏れてなかなか高俵には手が出せんのだ」

※端王 徽宗が八代皇帝になる前の称号。名は佶といった。

「経略使様、そのようなお話をしてもよろしいのでしょうか」

平真は、杜愔の立場を考えて心配した。

「もうよいのだ。儂ももう疲れた。よい引き際となるだろう。それにな平真、儂はおまえには知らせておくべきだ、そう思ったのだ」

「私にですか」

「そうだ。いずれ知っておることが役に立つ。そう思えるのだ」

杜愔の目は、慈愛に溢れているように、平真には思えた。父上。その言葉が、喉までせり上がってくるのを、平真はやっとのことで堪えた。

・・・

夕陽が優しく窓から射し込んでいる。夕陽の中を、気持ちよさそうに僅かな埃が踊っている。その舞を眺めながら、雪華はとりとめのない想いを巡らせていた。

「雪華姉様、痛みはどうですか」

黄玉が、心配そうに訊いた。

「動いたら痛むけど、前よりは退いているみたい」

「そうですか。わたしの方は、動かないかぎり痛むことはなくなりま
した」

「動きたいのでしょうか。公孫勝様が言っていたのを忘れな
いで」

「分かってます。出来るだけ動かないようにします」

「出来るだけじゃなく、絶対にね」

雪華はおかしそうだったが、黄玉はつまらなそうな顔つきになった。「それにしても、色々なことがありすぎたわ」

雪華が、溜息混じりに呟いた。

黄玉も、雪華の言葉に同意するように言った。

「わたしもそう思います」

「太原府に呼び出されたあの日から、わたしの、いえわたし達の運命はすっかり変わってしまったわ。もう二度と、今までのわたし達には戻れないのね」

雪華が辛そうに言った。

「雪華姉様、本当にあの日からだと思いますか」

黄玉がぼつりと呟いた。

「えっ、何のこと」

雪華は、黄玉の言うことが分からないという様子だった。

「わたし達の運命が変わったのは、雪華姉様が太原府におびき出された日からではありません」

黄玉が珍しく雪華の言葉に反論した。

「どういうこと。」

「雪華姉様、わたし達の運命が変わったのは、賊に襲われた三年前からです。」

「あの時から……」

雪華はその時を思い出したのか、言葉を詰まらせたようだった。

「正確には、村を立て直そうと心に決めた時と言った方がよろしいでしょうか」

「どうしてそれが」

「姉様とわたし達は、村を立て直すにはどうしたらいいのかと、幾日も話し合いましたよね。賊に襲われた三日後からでした。そして、姉様は遼との交易を選ばれました。本来なら仇と言ってもいい遼との」
「それは、黄玉。村を出来るだけ早く立て直すためには、交易が必要

だったからよ。何もないわたし達が復興の資金を得るには、交易が一番てつとり早い。そう思ったからよ。それも、普通のことでは商人達に敵うわけがない。それにわたし達は、そんなに多くの利など必要じゃなかった。それで、宋の商人があまり目を向けなかった場所や人々との交易をしようと思ったの」

「ですがそれは、宋や遼の既存の商人にとっては、不愉快だったことは間違いありません。役人にとってもです」

「わたし達は、賄賂を一度も使わなかったしね」

「姉様の信条でしたから。そしてそれは、わたし達の総意でもありませんでした」

「賄賂を使う。それが物の値に上乘せされる。そういうことをずっと続けているからいつまでたっても物の値は高いまま。人々は、物そのものの値に加えて、役人が掠め取る賄賂の分まで負担させられているわ。時には、物の値の何倍もの額を」

「その通りだと思います。ですが、わたし達が正当な値で交易をすればするほど、民は物の本当の値を知ることになります。大商人がいかにも暴利を貪っているか。わたし達は、結果的にそれを白日のもとに晒したことになるのです」

「そんなに目障りだったのかしら」

「酷いものでした。宋からも遼からも、幾度も邪魔が入りました」

「知らなかったわ。ずいぶんと黄玉に迷惑をかけたのね」

「いえ、わたしなど大したことはありません。最も辛い思いをしたのは、聞起そして曹瑛だったでしょう」

「あの二人には、確かに苦勞をかけたと思うわ。でも黄玉、あなたは一番危険なところを引き受けてくれていた。感謝してるわ」

「それしか出来ませんから」

「聞起は、よくあなたに助けられたと言っていたわ。でも、時々邪魔だとも言っていたわ」

「聞起がですか」

「あなたは、自分のことを気になさすぎるのよ。聞起は遼で、若

い娘達の注目を集めていたのよ」

「ええ、それは知っています」

「でも、あなたと一緒にのころを見ると、その娘達が離れて行ってしまうつて嘆いていたわ」

「どうしてですか」

「だからあなたは、自分がどう見られているか、もっと知っておくべきなのよ」

そう言つて、雪華が笑い出した。つられて黄玉も苦笑したようだった。

「ねえ、黄玉。あなた憶えてる」

暫く笑い続けた後、少し真剣な顔で雪華が訊いた。

「何をでしょうか」

「あなたが九つの頃だったかしら。汾水の川岸に、露を採りに行ったことを憶えてる。あの時は、曹瑛が熱を出して寝ていたから、あなたとわたし、二人だけで川岸に行ったわ」

「ええ、思い出しました。姉様はあの辺りを、輝水の庭と呼んでおられました」

「そう、輝水の庭。特に春には、水面が輝いて、この世のものとは思えないほど美しいの。あそこで、わたしが露を採りに林の中に入った途端、大嫌いなあれが木の枝から落ちて来たわ」

雪華は、思い出すだけでぞつとするのか、首をすくめるような仕草をした。

「そうでしたね。雪華姉様は、蛇が大嫌いなんですものね」

黄玉がおかしそうに言った。

「それも、肩の上に落ちて、そのままわたしの首に巻きついたのよ」

「思い出します。姉様の顔は真っ青でした」

「気を喪うと思つたわ。大嫌いな蛇が、それも首に……」

「姉様は、他の何も恐がらないのに、蛇だけは苦手でした」

「あなたは、その蛇の頭を捕まえて投げ捨ててくれた。わたしは、心の臓が止まると思っていたから、あなたが神様のように思えたわ。し

かも、あなたは手を咬まれた。それでも泣くこともなく、蛇の頭を捕まえ続けた。本当にありがたかったわ」

「あの時は、咬まれたことにも気づきませんでした。姉様から蛇を引きはがす、それしか考えていませんでしたから」

「そうだったの。わたしはその後、大泣きして一つ下のあなたに抱きついたわ。恥ずかしさも忘れてね」

「わたしだって、蛇が巻きついたらそうなります」

「黄玉も蛇が嫌いな」

「ええ、姉様と同じくらい苦手です」

黄玉があつさり認めめた。

雪華が、信じられないという顔で黄玉を見詰めた。

「だって、蛇をもっともしていなかったわ」

「姉様を助けたい。その一心でしたから」

雪華は言葉を詰まらせた。そうだった、いつも黄玉はわたしを護ってくれていた。一点の曇りもなく。雪華は、心から感謝の気持ちが出て来るのを感じた。

「ねえ、黄玉。どうしてそんなに、わたしを護ってくれるの」

雪華の問いは、今まで避けていた言葉だった。訊いてはいけない。そんなふうに感じていたからだだった。

黄玉は、少しの間逡巡していったようだった。やがて、黄玉は口を開いた。

「姉様は、わたしが本当の子ではないことを知っておられますよね」
雪華は、心の臓が縮むような気がした。知っていた。黄小父さんが、父である宋江と話をしていたのを、偶然に聞いてしまったのだった。
黄小父さんは、黄玉が六つの時に宋家村にやって来た。妻である柴小母さんと、嫦娥※のように美しい女の子を連れて。

「知っていたわ」

※嫦娥 月の女神。西王母の不老不死の仙薬を飲み、

月に昇って神となった。その美しさで広く知られている。

雪華が答えた。隠しておくのはよくない。そう感じたからだだった。

「わたしは十三の時に、父から聞かせられたのです。ちょうど賊に襲われた歳の春です」

「そうだったの」

「父と母が、仕事で延安府※に向かう途中、わたしを見付けたのだそうです」※延安府 永興軍路の主要都市。辺境防衛の重要拠点。

「黄小父さんは、腕のいい鍛冶かじでしたものね」

「延安府の将軍に頼まれて、刀を一振り打つことになっていたそうです。その道中、森の入口で、一組の男女が斬られて死んでいたのだそうです。そして、二人の遺体の下に、泣いていたわたしを見付けたのです」

「じゃあ、その人達があなたの……」

「断定は出来ません。赤子あかこを連れ去っただけかもしれません」

「そんなこと」

「わたしの父と母は一人ずつ。それに変わりはありません」

「それはそうだけど」

「子供のいなかった父と母は、わたしを拾って育ててくれました。そして、わたしが六つの時に、村に定住することにしました。わたしが、言葉をおさなくなったからです」

「言葉をおさなかった。ああ、そうね。村に来てから、暫くあなたは人前に出て来なかったものね」

雪華は、黄玉に初めて出会った時のことを思い出していた。目が覚めるほど綺麗な顔立ちをした少女だったが、頑こなに人との接触を拒んでいるような、そんな厳しさを感じさせられたのだった。

「物心ものごころついた頃から、わたしは、他の子供達から除はずけ者にされています。この目の色で」

黄玉の瞳は、かなり青みがかっている。小さな頃は、もっと青みが強かった。雪華は、そんなことを思い出していた。

「どこに行っても、青い目をした鬼※の子と言われて、石を投げつけられたり、棒で追われたりしました」

※鬼 亡者のこと。日本の感覚では幽霊に近い。

そうだろう、と雪華は思った。子供は、時として大人よりも残酷になれる。幼い頃の黄玉の目の色は、子供にとっては、十分除け者にする理由になっただろう。開封府や辺境と違い、この辺りでは西域人は珍しかった。大人ならいざ知らず、子供にとっては異質な存在に思えたことだろう。

「それよりもっと辛かったのが、大人でした。わたしが泣いて逃げていると、どこからともなくやって来て、慰めるふりをして身体に触れてきました。それも、耐え難いほどしつこく」

雪華は衝撃を受けた。そして、すぐにそうだろうとも思った。あの頃の黄玉を、そうした趣味を持つ大人が、放っておくはずがなかった。まして、深窓の令嬢でもない民の娘を。

「それからわたしは、人を信じなくなりました。両親以外の誰をもです。ほとんどを家の中で過ごし、たまに外に出ても、いつも一人で遊んでいました」

だからあんなに色が白かったんだ。雪華は納得した。雪と言うより、氷のように透き通った肌だった。そしてそれは、今も同じだった。氷姫。聞起がつけた緯名は、黄玉の容貌をよくとらえている。透き通った肌と青い目。まさしく氷の化身のようだった。

「黄玉、あなたが見付けられた時の二人は、本当の父母とは考えられないの」

「父から聞きました。二人は漢人だったそうです。後からわたしの目を見て不審に思った父が、付近の村を調べると、西域人の隊商を襲った山賊がいて、その隊商には女の赤子を連れた夫婦がいたと言っていたそうです。もちろんその夫婦を殺したそうですが、赤子については分からないと言っていたそうです」

雪華は、黄玉の詳しい過去を初めて知った。そして、少なからぬ衝撃を受けていた。

「わたしはおそらく、その隊商の夫婦の子だと思えます。二人の漢人は、わたしを助け出そうとしたのか、あるいは売ろうとしたのか、今になってはもう分からないことです」

「きっと助けようとしたのよ」

雪華は、大げさなほど明るい声で言った。黄玉は口元で微笑んだだけだった。

黄玉が西域の血を受けているのは、間違いのないことだろうと雪華は思っていた。それも、遙か西。羅馬。※そんな言葉が頭に浮かんできた。そうであれば、黄玉の瞳の色も、女としては大柄な身体も十分理解出来た。※羅馬　ローマ。

「そんなわたしを両親は心配して、定住することにしたのです。仕事のあるところを転々とする。それが悪いのだと思ったのでしょーうね。わたしが六つの時、宋家村に定住することになったのです」

「憶えているわ。黄小父さんは、父の古くからの知り合いだったし、村に鍛冶はいなかったから。父が黄小父さんの話を聞いて、是非とも村に住んでほしいと頼んでいたのを見たの」

「わたしは、宋家村で救われたのです。雪華姉様にです」

「わたしなんか何も……。ただ黄玉、あなたと遊びたかったのよ。こんな可愛い女の子と遊べたらいいなって、ただそう思っただけ」

「暗い洞窟の中にいる。あの頃のわたしは、そんなふうに思っていました。わたしは鬼の子だから、皆と一緒に遊んだりは出来ない。そう思っていたのです。それなのに、村に入って五日で、雪華姉様はわたしを洞窟から連れ出してくれました。差し伸べられた姉様の手が、暗い洞窟から光の中に導いてくれる、白い蝶のように見えたのを憶えています」

「大げさよ、黄玉。わたしがあなたより一つ歳上だった。ただそれだけのこと」

「それでもいいのです。わたしが姉様に一生ついていこうと決めたのは、その時だったのです。他の皆も優しくかった。曹瑛は、少しわたしを恐がっていたようでしたが」

「そうね。あの頃の皆を思うと、今がとても信じられないわ。陳統なんて、いつも涙を垂らしていたものね」

「聞起は、恐かったのですよ。初めの何日かでしたけど。石勇は、あ

の頃から身体が大きくて力も強かったのですが、どこか優しいところのある子でした」

「聞起は照れ屋だったのよ。可愛い女の子を前に、精一杯強がついてだけ」

二人は大笑いした。

「でも、わたしは思ったのです。こんな美しい姉様が出来て、わたしは何て幸せなのだろうと。そして、わたしの命が続く限り、この幸せを守るのだと」

黄玉はそう言って、上掛けに顔を埋めた。

黄玉の透けるような頬を、一筋の涙が伝い落ちた。

「黄玉、わたしはそんな大それた者ではないわ。ただの馬鹿な村娘。皆に、こんなに迷惑をかけた愚か者。それがわたしよ」

雪華がそう言って、黄玉に微笑みかけた。

「いえ、今でも、そしてこれから、姉様はわたしを光へと導いてくれる純白の蝶です」

黄玉の声は微かに震えていた。

「黄玉、わたしも精一杯生きるから、お願いだから命を粗末にしないでね。あなたがわたしを思うのと同じように、わたしもあなたが大切な。だから、無茶をしてわたしを悲しませないで」

しばしの間を置いて、黄玉がはいと答えた。上掛けに隠されて、雪華はついに、その表情までは読み取れなかった。

•••

二日、禁軍の動きがなかった。李逵は一の木戸の大門に立って、禁軍歩兵本隊の動きを注視していた。

「曹瑛、どう思う」

李逵は、並んでいると子供のようにも見える、華奢な曹瑛に訊いた。

「李逵様、わたしには何かを待っている。そう感じられます」

曹瑛は、真剣な目で歩兵の動きを見詰めている。

李逵は曹瑛の様子を見て、不思議なものでも見るような顔をしていった。

曹瑛は変わった。つくづくそう感じた。以前は、頭はきれるが優しさがその行動を縛っている、そんな印象を李逵は抱いていた。太原府脱出の頃から、曹瑛は果敢な行動をとるようになった。もともと、抜群に頭のよい娘だったから、今では、李逵の片腕と言ってもよい存在になっている。

「曹瑛、おまえもそう思うか」

李逵は曹瑛の考えに賛同した。

「何かを待っている。確かにそんなふうに見えるな」

問題は、何を待っているかだった。開封府からの増援、それが最もあつてほしくない事態だった。今でさえ、ぎりぎりのところだった。これに開封府禁軍の精銳が加わったなら、万に一つも勝ち目はなかった。

「何だと思う、曹瑛」

曹瑛は李逵の問いに答えず、じっと歩兵の動きを見ていた。

「来ます。本隊の後ろが騒がしくなっています」

突然、曹瑛が声を上げた。李逵も歩兵の後方に目を遣った。

歩兵本隊の後方から、兵を割るようにして騎馬の一团が前進してきていた。その真ん中に、見事な甲冑を身にまとった將軍らしき一騎が確認された。

「あれは、河東路経略安撫使の杜愷じゃないか」

李逵が、独り言のように呟いた。

「知っているのですか」

曹瑛が訊いた。

「いや、顔は知らん。だが、あれだけの装備が出来るのは、総大将でなければ無理だろう」

「何故、今日になって動き出したのでしょうか」

「分からん。だが、今日は来る。それだけ分かれば十分だ」

「待ってください」

曹瑛はそう言った後、顔を上げて西の空を見た。

「嵐が来そうです。夜明けから風が湿りを帯びていました。きっと大嵐になると思います。禁軍は、これを待っていたのではないのでしょうか」

「嵐を。攻める側の方が不利ではないか」

「それ以上に嵐を必要としていた。そう考えられないでしょうか」

曹瑛は、真剣に何かを探っているようだった。

「不利を承知で、あえて嵐を待っていたというのか」

李達は、納得しかねるようだ。

「嵐で有利になること、それを今考えています」

曹瑛は相変わらず禁軍の動きを見詰めていたが、その頭の中は、別のことで一杯のようだった。

「分かったわ。潜入。きつとそうだわ。この砦の中に入り込んで、砦を内側から崩す。多分そう」

「潜入に気付かれんように、嵐の来るのを待っておった。そういうことか」

「正面の禁軍は、おそらく陽動。でもあの構えは、本気で攻めようとしている」

「陽動とばかりも言えんな」

李達も同意した。

「どちらにしても、受ける構えを整えんと」

李達が近くの兵に指示を与えた。主だった者を召集するためだった。

「公孫勝殿は」

李達が訊いた。

「雪華姉さんの手当てに行っています」

「そうか、終わったら来てもらおう」

半刻※もせずに、ほぼ全員が一の木戸の裏手に集まった。

※半刻 約十五分。

「今日は来そうか」

公孫勝が曹瑛に訊いた。

「はい。間違いなく」

曹瑛の答えに、公孫勝が肯いた。

「分かった。李逵殿、守りを固めよう。おそらく嵐になる。石油は使えぬ。石と櫓木が頼りだ」

「矢も役に立たぬしな」

「嵐の向きにもよる。追い風なら矢の威力は増す」

公孫勝が言った。わたしを庇ってくれたのかしら。曹瑛はそんなことを思った。

「潜入となると、どこからが考えられる」

李逵が公孫勝に訊いた。

「嵐を待っていたのだ。正面からということとは考え難い。砦の裏。玄女様の庵の方からだろう」

「奴等、あの裏道を見付けたのだろうか」

「分からない。だが、これだけ長い対峙なのだ、知られてもおかしくはない。経略使の杜愔は、賢い戦をすると聞いている」

「そうだな。裏に晁蓋も配置しよう。出来れば公孫勝殿も」

「分かりました。正面は、李逵殿、陳達殿、そして曹瑛。左右を聞起と陳統に固めさせましょう。私は表と裏、両方を見ることにします」
「幸い二日の休みがあつたので、陳達も晁蓋もかなり傷がよくなっておるようだ。兵達の疲れも取れておる。もつとも、それは向こうも同じだがな」

「宋雪華殿の傷もよくなっている」

「そうか」

李逵と曹瑛が、嬉しそうに顔を見合わせた。

「奇跡としか言いようがない」

公孫勝が感心したように言った。

「どうしてですか。血は合っていたのでしょ」

曹瑛が不思議そうに訊いた。

「実は、血が合うかどうかは、それほど重要ではない。それに、本当に血が合うかどうかを見るには、血を薄めなくてはならないのだ」

「何で薄めるのですか」

曹瑛が訊いた。知りたくて仕方がない、そんな様子だった。

「塩水だ。血と同じ塩辛さの」

「そうなのですか」

曹瑛の目が輝いていた。この娘はものになる。公孫勝はそんなことを感じていた。

「その薄めた血どうしを混ぜて判断する」

「では、どうして黄玉には……」

「ただ血を混ぜ合わせてもすぐ固まる。それで諦めさせようとした」

「それでも固まるのが遅かった」

「血が合っていたのは間違いない。ただ、一つ失敗したことがある」

「何を失敗したのですか」

「黄玉の涙が零れ落ちた。それで薄まったのだ」

曹瑛は感心したように口をつぐんだ。黄玉の祈り、それが通じた。

曹瑛は、そう心の中で思った。

「それでも、皮がつくことは滅多にない。血が合う以上に重要なものがあると考えるしかない。だから普通は、火傷を負った近くの自分の皮を、一部つながったままで移すのだ。これを皮弁と呼んでいるが、こちらは自分の皮なのだから、ほとんどがつく。こんなに移植がうまくゆくのは、私の経験では初めてだ。だから、奇跡としか言いようがないのだ」

公孫勝は、そう言って溜息をついた。喜びと満足の溜息だ。曹瑛はそう思った。

小屋から、九天玄女が時遷と共にやって来た。いつもより真剣な顔つきになっていた。

「入雲竜、天魁の星の護りを固めよ」

九天玄女の声には、切迫した色があった。

「何か、つかまれたのですか」

公孫勝が訊いた。

「時遷の手の者が、禁軍の中に紛れ込んだ。そこでつかんだ情報だ」

九天玄女に代わって、時遷が話しだした。

「経略使の杜愔の幕舎に、全身黒づくめの不気味な男が入り、その後から軍の方針が変わったというのです。報せたのは、私の手の者の中でも優れた男です。まず、間違いはないかと」

「どのように変わったのですか」

「空が荒れるまで、攻撃を控えると」

「ふうむ。それは明らかに、何かの企みがあるとしか思えぬな」

公孫勝は、考える間もなく暗殺を懸念した。

「九天玄女様、これは開封府が絡んでいると思われませんが」

九天玄女も同じ考えのようだった。

「まだ断定は出来ぬが、私が思っている者達だとすると、油断は出来ぬ。入雲竜、おまえが警護しなくてはならぬ」

「どういう者達なのですか」

「今はまだ言えぬ。私とも関りがあるのでな」

「九天玄女様と……」

公孫勝の言葉に、九天玄女は答えなかった。

「地周の星よ、脚の方はもうよいのか」

九天玄女が、陳達に言った。

「地周の星……。何のことです」

「分からなくてもいい。陳達、今からおまえは地周の星だ。よかつたな、星を貰えて」

李達が笑いながら言った。陳達は何のことか分からず、目を白黒させるだけだった。

「李達殿、どんな事態に陥ろうとも、私達は全力で宋雪華殿を護らねばならない。表は李達殿、裏は私ということだ」

「そうだな、ここまで来たら、やるべきことをやって、後は天運に任せるしかないだろう。皆、最後までやりぬくぞ」

李達の言葉に応えて、全員の雄叫びが一の木戸にこだました。

士気は禁軍の比ではない。李達はそう確信した。だが、この圧倒的な数の差をどうするか。李達はそれを考えると、胃の腑が縮むように

痛むのを感じた。

「李達様、風が強くなって来ました」

曹瑛だった。

「そうだな。このぶんだと、雨も来そうだ」

「雨になれば身体が冷えます。小屋の中に火を用意しておきます」

「そうだな。そうしてもらえれば皆助かる。冷えたまま戦っておると、思わぬ怪我を負いかねん。さすがは曹瑛だ」

李達の褒め言葉も聞き終わらぬうちに、曹瑛は小屋に向かって駆け上って行った。小屋は、雪華と黄玉のいる大きなものを含めて全部で五つある。そのそれぞれに、暖まることの出来る火を用意しよう。曹瑛はそう思っていた。

最初に、雪華と黄玉のいる小屋に入った。

「曹瑛、よく来てくれたわ」

雪華が喜びの声を上げた。

「姉さん、公孫勝様がとてもよくなっているとっておられました」

曹瑛の声も、明るさに満ちていた。

「本当に、公孫勝様にはお礼の言いようもないわ。自分でもよくなっているのが分かるの。傷の痛みも軽くなってきたし、身体のたるさも取れてきているわ」

「姉様、だからといって無茶はいけませんよ」

黄玉の声だった。

「黄玉、それはあなたに言いたいわ。あなただったら、じっとしているのに耐えられなくて、今朝から寝返りばかりしているじゃない」

「傷が痒いだけです」

黄玉が、慚然とした表情で言い返した。

「傷が痒いということは、治ってきている証拠ね。黄玉は心配ないって、公孫勝様が太鼓判を押していたわ。ただし、じっとしていられたらの話だって付け加えていたけど」

雪華と曹瑛が、顔を見合わせて笑い合った。黄玉は、ますます慚然とした表情で天井を見上げていた。ひとしきり笑い合うと、曹瑛は竈

に火を入れだした。

「ああそうね。風が強いし、嵐になりそうですものね」

雪華が言った。

「外で戦う人達が暖まれるように、五つの小屋総てに火を入れます。この小屋も賑やかにあります。おちおち寝ていられないかもしれないかもしれません」

曹瑛は、そう言つて黄玉を見た。

「寝てられないのは都合がいい。そのまま起きていたいところだ」

黄玉が、半ば本気で呟いた。

「乙女が寝ている小屋になんか来ないわ」

冗談めかして雪華が言った。

「どこに乙女がいます」

黄玉だった。

「それもそうね。乙女なんて言えるのは、曹瑛くらいのものね」

雪華の言葉に、曹瑛は苦笑しただけだった。楽しい。曹瑛は、心からそう思った。雪華姉さんはもちろんのこと、黄玉も、聞起も、そして陳統、石勇も、皆かけがえのない仲間だった。わたしは恵まれている。曹瑛は、誰かに感謝したい気持ちになった。

「曹瑛、外の様子はどうなっているの」

雪華が訊いた。知りたくて仕方がない。そんな顔付きだった。

「どうって」

「戦のこと。李逵も公孫勝様も、教えてくれないの」

「ああ、そうですね。勝ち戦です。こちらの犠牲は少ないようです。半ばは本当で、半ばは嘘だった。確かに十倍の兵力差を考えると、勝ち戦と言ってもよかった。だが、犠牲は決して少なくはなかった。兵力差を比較すると、敵が五人死ぬよりも、こちらが一人死ぬ方が痛かった。すでに、こちら側の死者は五十人近くに達している。公孫勝の手当ても虚しく、怪我を負った者の多くが死んでいった。これ以上の損耗は致命的と言えた。それでも、公孫勝はもたせるつもりでいる。確かにもつかもしれなかった。だがそのためには、もっと多くの犠牲

を必要とすることも確かだった。

「曹瑛、本当のことを教えて」

雪華は真剣な顔をしていた。曹瑛は言葉に詰まった。

「禁軍の兵数はどのくらいなの」

「四千人。でも、五百以上は減っているわ」

今度は、雪華が言葉を失くした。黄玉も、緊張した面持ちだった。

「そうとは聞いていたが、本当にそれほど大部隊を……」

雪華は力なく呟いた。

「でも、公孫勝様は大丈夫だと」

曹瑛が、ことさら明るい声で言った。

「攻城戦には三倍の兵力と言われているわ。それは、裏返せば、三倍の兵力があれば城郭じょうかくも落とせるということよ。まして、ここは城郭ほどの防御は望めないわ」

「姉さん、公孫勝様与李逵様を信じましょう」

曹瑛が優しく言った。

「もちろん、信じている。ただ姉様もわたしも、皆が必死に戦っているというのに、こうして寝ていなければならぬのが辛いのだ」

黄玉は本当に辛そうだった。

「黄玉、あなたは仕方ないわ。自分で選んだことだから」

曹瑛に言われて、黄玉は黙ってしまった。

「二人ともやめなさい。とにかく、わたし達が傷を早く治すことね。」

わたしはともかくとして、黄玉は後二三日で糸を抜くと思うの。そうすれば、今よりは動けるようになるわ」

「糸を抜いた後が大事と、公孫勝様が言っていたわ」

「曹瑛、おまえはわたしをいじめているのか」

黄玉がうんざりとした様子で言った。

「そんなことはないわ。わたしは、黄玉に治ってほしいだけ。前のような美しい黄玉に戻ってほしいの」

「姉様も曹瑛も。わたしは美しくなどないし、それを望んでもいない。それを言うなら、姉様や曹瑛の方がよほど美しい」

黄玉は、半ば本気で怒っているようだった。

「黄玉らしいわ」

雪華が、曹瑛に笑いかけた。曹瑛も、笑いながら肯いていた。

笑い終えて、曹瑛は微かな胸の痛みを感じた。仲間を助けること、それは同時に、還^{かへ}るあてのない片道の出発^{しゅつぱつ}を意味していた。雪華と黄玉の笑い声が聞こえて来る。それを遠くに感じながら、曹瑛は必死に心の迷いを振り払っていた。